



Hello峰山



市HP内掲載記事へ

	R3.3末	前月比	R3.2末
0歳～14歳	1,457	9	1,448
15歳～64歳	6,695	-7	6,702
65歳～	3,904	0	3,904
合計	12,056	2	12,054

「農業の礎築いた偉業」 丹波の大溝

その始まりは、江戸時代（1648年頃）。丹波村の土地は、竹野川よりも高い平坦地であったため、日照りになると、しばしば水不足に陥り、農作物への影響に悩まされていました。

当時の年貢は個人責任ではなく、村全体の問題であったことから、村役人だった伊左衛門が、村人の苦悩を思い、水不足解消のために立ち上がりました。

夜中に提灯を立て、竹で作られた水平器や筒を使い、約半年間をかけて測量した結果、新山橋から約200m上流の荒山地内にある竹野川と鱒留川の合流地点に水門を設けて大溝（用水路）を掘れば、丹波村の水田に水を引くことができると判断しました。

伊左衛門は、村人たちに大溝工事について数回に渡り説明をしましたが、当初は理解を得られず、相手にされませんでした。伊左衛門は村の庄屋と相談し、完成しなかった場合は自分の首を差し出すと誓いを立て、ついに村人の賛同

*長方形の樋。大溝が小西川にぶつかってしまうことを避けるために作られた。かつては木製で水路樋としても機能していた。「はこどい」とも。



箱どよ*を通して小西川を越え丹波に水が渡った



丹波の大溝を示した峰山町内地図

と、庄屋から井堰を設け大溝を通す許可を得ることができました。こうして、6年間に及ぶ工事のすえ、総延長793間（1427m）の「丹波の大溝」が完成しました。以後、現在まで約400年に渡り、丹波の田の約4割を潤しています。

管理栄養士・関奈央弥の食育コラム② 丹後で行う「食育」の可能性



地域おこし協力隊の関です。先月号に続いて『食育』についてのコラムをお届けします。今回のお題は丹後で行う食育の可能性について。

私が以前、東京都の小学校で5年間栄養士として勤務していた時のことです。そこでは『地産地消』に取り組もうという動きがありました。地産地消には『生産者の顔が見える』という良さがあります。私は、それを子どもたちに伝えるため、都内の農家さんを取材し、農家さんからいただいた野菜を使った給食を提供しました。写真を見せながら、『都内のこんなところに、畑があるんだよ。』『この農家さんは、子どもたちのために安心安全なお野菜を作りたいという思いをもって農

業をされているのだよ。』と話をしました。すると、子どもたちが苦手な野菜を食べるようになったのです。私はこの時、生まれ故郷であり、農作物や水産物が豊富な丹後なら、その環境を活かし、より充実した食育を行うことができるのではないかと可能性を感じました。

現在、地域の農家さんの協力を得ながら、米作り体験の場を作っています。今後も丹後の食環境を活かし食育を続けていきたいと考えております。



一昨年に行われた田植え体験